

外国語学習者の持つ言語能力の把握とその適切な測定
浦野 研 (北海学園大学)
urano@ba.hokkai-s-u.ac.jp

はじめに：

- 次の質問のうち、語彙テストとしてどれが一番よいでしょうか。

1. 次の単語のうち、見たことがあるものに をつけなさい。 birb pencil ragget	5. 次の単語の意味としてふさわしいものを、選択肢から 1 つ選びなさい。 pencil a) 壁 b) 馬 c) 鉛筆
2. 次の単語のうち、正しいものに をつけなさい。 bencil pencil pensil	6. 次の単語の意味としてふさわしいものを、選択肢から 1 つ選びなさい。 pencil a) part of a house b) animal with four legs c) something used for writing
3. 下線の単語が正しく使われている英文を、選択肢から 1 つ選びなさい。 a) My brother eats a <u>pencil</u> after dinner. b) You need a <u>pencil</u> to take the exam. c) I often sleep on a <u>pencil</u> .	7. 次の単語を使って英文を書きなさい。 pencil _____
4. 次の単語の意味を日本語で書きなさい。 pencil _____	

- 「よいテスト」の条件は、「何のテストか (何を測定しているのか)」という視点なしでは議論できない。 構成概念妥当性 (construct validity)
- 「よいテスト」の条件には他にも信頼性、実用性等考慮すべき点があるが、それについての議論はこの発表では割愛する。

発表の論点：

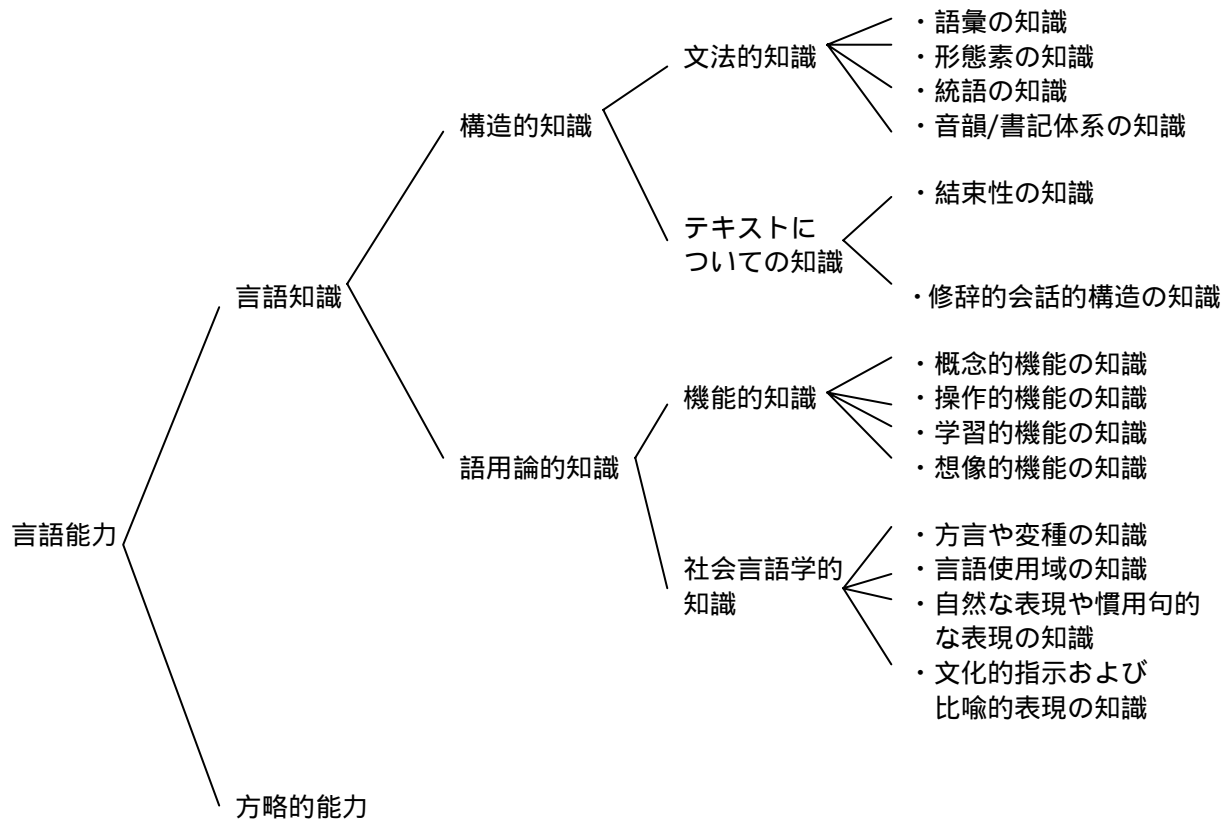
- 言語テストにおける構成概念妥当性検証の重要性と、その検証方法。
- テスト論での構成概念妥当性 (「言語能力」観) に関する議論。
 - 特に「言語知識」に焦点をあてて
 - 「語彙力」とは？
 - 言語「知識」に関する知見
- まとめ

構成概念妥当性検証法：

- Bachman (1990)
 - 同じ種類の能力を測定しているとされる他のテストとの相関を調査する。
 - 実験的手法を用いて実証的に検証する。
 - テストの得点を見るのではなく、それに至ったプロセスを分析する。
- テスト研究の多くは、相関を利用した妥当性検証法を用いるが、構成概念に関するもっと理論的な議論があった方がよいのではないか。

テスト論における「言語能力」観：

- Bachman (1990; Bachman & Palmer, 1996 など) のモデル



注：日本語の用語は、Bachman & Palmer (1996) の日本語訳（大友・スラッシャー, 2000）を参考にした。

語彙の知識：

- 「語彙の知識」とは？
 - この分野だけでも実に様々な研究がある（Nation, 2001 などを参照）
- 語彙の知識の細分化（例）
 - ある単語を見た（聞いた）記憶がある
 - その単語の意味がわかる
 - 適当な訳語は思い浮かばないものの、大まかなニュアンスはわかる
 - 訳語が言える
 - 同義語などが言える
 - 定義ができる
 - その単語を表出で使うことができる
- 語彙テストを作成するとき、語彙知識のどのレベルを測定したいのか、きちんと検討すべきである。

まだまだある、語彙に関する知識：

- 統語に関する情報（知識）の多くは語彙に含まれる
 - 例1）次の対比に見られる give と donate の統語的機能に関する知識
 - I gave a ring to her. I gave her a ring.
 - I donated books to the library. *I donated the library books.

- 例 2) 代名詞と再帰代名詞
 - Tom thinks that Ken hates him. "him" ≠ Ken
 - Tom thinks that Ken hates himself. "himself" = Ken

語彙、形態素、統語のインターフェイス：

- Pinker (1991, 1999 他) の dual-mechanism model
 - 規則動詞 (名詞) は抽象的な知識として習得される。
 - 不規則動詞 (名詞) は単語として 1 つずつ習得される。
 1. Mary go to the supermarket yesterday.
 2. Mary goed to the supermarket yesterday.
 3. Mary went to the supermarket yesterday.
 - 上の例で正しく went を使うには、時制に関する知識と、適切な不規則動詞の語彙項目の両方の知識がなければならない。

ここまでのまとめ：

- 一口に「言語能力」といっても、簡単に把握できるものではない。
- テスト作成時には、具体的に何を測定したいのか (すべきなのか) きちんと検討する必要がある。
- テスト分析時には、そのテストに正答するというのとは具体的に何ができることを意味するのかを、分析、検証する必要がある。

言語「知識」とは：

- 言語について「知っている」というのはどういうことか。
 - 次の分の誤りを訂正しなさい。
One of my friends teach English in Thailand.
 - この問題に簡単に答えられる上級学習者にも、自発的な発話の中でこのような誤りは頻繁に見られる。
- 2 種類の言語知識
 - 明示的知識 (explicit knowledge)
 - 暗示的知識 (implicit knowledge)

明示的知識と暗示的知識の関係：

- 第二言語習得 (SLA) 理論
 - 言語学 (特に普遍文法) に基づく SLA 理論 (Hawkins, 2001; White, 1989, 2003 など)
 - 認知心理学、心理言語学に基づく SLA 理論 (Robinson, 2001 ; Skehan, 1998 など)
- 共通認識
 - 言語習得とは、暗示的知識の獲得を意味する。
- 相違点
 - 明示的知識の役割
 - 言語学に基づく理論：明示的知識の役割はほとんどない。
 - 心理学に基づく理論：明示的知識は、認知プロセスを経て暗示的知識に変わりうる。また、明示的知識が暗示的知識獲得の手助けともなりうる。

テストで測定する言語知識：

- 言語テストが、どのような知識を測定しているのかについて検証する必要がある。
- 一般的な「文法テスト」の大半は、明示的知識を測定していると考えられる。
- 暗示的知識を測定するには他の測定方法を考えるべきである。

まとめ：

- 言語テストの作成、分析における構成概念妥当性検証の重要性
 - 「言語知識」の細分化
 - 「知識」に関する考察

結論：

- 学習者の言語能力、知識に関するしっかりとした知見（理論的、実証的裏づけのあるもの）を持ち、それに則したテストを作成、実施することが望ましい。
- 上の「知見」については、自分で研究してもいいし、幅広く行われている SLA の先行研究を調べてもいい。

かみくだくと：

- テストで何を測定したいのか、もしくは今目の前にあるテストが何を測定する（できる）のかを考えてほしい。
- 外国語教育に携わるものとして、学習者（生徒、学生）が持っている言語能力、知識や、これから身につけてほしい能力、知識について考えてほしい。

引用文献：

- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bachman, L. F., & Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice: Designing and developing useful language tests*. Oxford: Oxford University Press. [大友賢二・ランドルフ・スラッシャー. (監訳). (2000). 『<実践>言語テスト作成法』. 東京: 大修館.]
- Hawkins, R. (2001). *Second language syntax: A generative introduction*. Oxford: Blackwell.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pinker, S. (1991). Rules of language. *Science*, 253, 530-535.
- Pinker, S. (1999). *Words and rules*. NY: Basic Books.
- Robinson, P. (Ed.) (2001). *Cognition and second language instruction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- White, L. (1989). *Universal Grammar and second language acquisition*. Amsterdam: John Benjamins. [千葉修司・ケビン・グレッグ・平川真規子. (訳). (1992). 『普遍文法と第二言語獲得：原理とパラメータのアプローチ』. 東京: リーベル出版.]
- White, L. (2003). *Second language acquisition and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.